

Gilletteでいちばん混み合う場所

（なお待ち続ける者の目から）

「クリニックは患者を治す。ケアする共同体は人を支える」

I. いちばん混み合う場所

医療施設でいちばん混み合う場所はどこか。

ホールではない。

診察室でもない。

待合室でもない。

廊下でもない。

いちばん混み合う場所は、どの見取り図にも載っていない。

未来だ。

入ってくる者は誰もが、問いをひとつ抱えている。

患者も。

家族も。

医師も。

看護師も。

経営陣も。

床を掃除する人でさえ。

どう終わるのか、本当に知っている者はいない—あるいは、怖さから、知っているふりをしているのかもしれない。

それでも、誰もが明日の予定を立てつづける。

これほど多くの人が同じ現在を一度に生き、同じ未来に、意地でも住みつづけているのを、私はほかのどこでも見たことがない。

だから私は、墓地こそ自分の知るかぎりいちばん混み合う場所だと思っている。

II. エピローグ

生の反対は死だと、多くの人は考える。

私はそこまで確信が持てない。

リハビリ施設、病院、介護施設、そして墓地で時を過ごしたあと、私は別の結論にたどり着いた。

生の反対は死ではない。

忘却だ。

おそらくそのために、墓地は私の知るなかでも指折りの混み合う場所なのだ。

人で、ではない。

記憶で。

私たちは一生、墓地を怖がっている。

子どものころは、あれは終わりの場所だと教えられる。

大人になると、避けることを覚える。

行くのは義務から、命日だから、礼儀だからだ。

黙って入り、できるだけ早く出てくる。

それでも、よく見てみて気づいた。墓地は死者の場所ではない。死者はそこにいない。

かつて住んだ家にいる。

遺した言葉のなかに。

私たちが彼らから覚えた仕草のなかに。

受け継いだ欠点のなかに。

いまも語りかけてくる不在のなかに。

墓地は生きている者の場所だ。

戻ってくる者の。

覚えている者の。

もう答えることのできない誰かに、まだ言いたいことがある者の。言わせてもらおう。これは、そこへ行ってはみたものの、居場所が見つからなかった者の言葉だ。

III. 著者のページ

この作品は依頼されて書いたものではない。

売られたものでもない。

商業目的で作られたものでもない。

リハビリテーションの価値、人間の尊厳の価値、そして人と人との関係の価値を証言するために書かれた。

求める対価は、象徴としての1ドルだけ—作品への支払いとしてではなく、ケアと希望と責任の文化をともに担うという約束の証として。

フェルディナンド